

〔文献紹介〕

樋 英雄著 辺境と文化

郷土愛の表現の仕方にもいろいろある。文化の探求というもののひとつであろう。愛すべき郷土をもち、愛すればこそ真の姿を見極めたいと欲するのが自然の理と思われるからである。「木曾谷歴史文化研究叢書」の第一冊である本著には、小冊子ながら、郷土の文化の探求とそこから将来される保存発展への願いが痛いほどに込められている。それも単に感傷的に訴えかけるというのではなくて、民俗学のみならず歴史・地理・経済等の立場から分析を加え、冷静に語られるのである。その繊細緻密な語りくちは、著者の力士然とした体軀からは想像できない程である。

本著は、木曾谷の歌・漆器の副題のもとに、「木曾節と南信濃の盆踊歌」、「三岳村の民謡」、「木曾漆器を生んだ自然とその苦難の歴史」、「辺境の文化」の四編からなる。

「木曾節と南信濃の盆踊歌」と「三岳村の民謡」は、大正時代に整理・統合され全国的に知られるようになった木曾節の陰に、切り捨てられ忘れられてしまったもののあることを再認識せよと訴えている。大正の末に柳田国男によって紹介され「古風の遺物と化するもの、もう遠いことではない」といわれた現阿南町新野の盆踊りの予想外の根強さを例に、辺境の文化の真の在り方を問う。また谷底集落の多い木曾のなかでは特異な山村三岳村、さらに王滝・開田の両村を加え、作業歌・祝い歌を採集しつつ、地理的隔絶性のみによる性格の因由をみることなく、景観を歴史地理的に分析している。

木曾谷の歌は信仰に結びつくものより生業に関係するものが圧倒的に多いという著者の見解にしたがえば、そうした木曾谷各地の消えかかった歌を保存することは、とりもなおさず木曾谷の「生活」の発展を願ってのことに他ならない。切り捨てられ忘れられてしまったものこそ「保存会」で「保存」する意義があるであろう。「生活」のできない大地は、結局は愛着なき大地となりはてるとは、まさに著者の切実な嘆きの言葉なのである。そうした著者の姿勢は、「木曾漆器を生んだ自然とその苦難の歴史」のなかにさらにはっきりとみることができる。ここでは木曾最北檜川村を取り上げ、例えば奈良井宿発展に於ける鳥居峠の存在など、多方面から集落の立地条件・景観を分析する。そしてその苦難の歴史を紹介しながら、平沢を中心とする漆器産業の成立と発展の因由を歴史地理的に説明する。そうした上で、いわゆる伝統産業の将来の在り方に言及するのである。

講演記録「辺境の文化」には、これまでのまとめとして、辺境の概念をはじめその芸能・教育・文化の現状が平易な説得力のある語りくちで示され、それぞれに著者の思うところが語られている。

「いくたの失敗の中から成功へと結びつける力の根源である活力が生まれ」辺境の文化を支えてきたのである。経済的風土が自然地理的風土に優先するという木曾谷に於いては、ために沮喪しつつある活力を恢復することこそ急務であり、著者の最も熱望し、かつ信じてやまないところなのである。その愛すべき郷土のために。

(A5版、本文五八頁・口絵写真五頁、発行者尾崎常雄・木曾郡上松町「御宿寝覚宿」内、非売品、一九七八年九月)

(樋口政則・国学院大学院生)